

おう！席つけー！チャイム鳴ったぞ！

さて、今日は【心の哲学続編】ということで、20世紀最大の天才であり、そして最高の変人でもあるルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの『哲学探究』を読んでいくぞ。

みんな、前回のデカルトや心身二元論の話、覚えてるか？「私の心は私にしかわからない」という、あの思春期特有のポエムみたいな前提な。今日はその前提を、ウィトゲンシュタインがハンマーでぶっ壊す痛快な話をしよう。

じゃあ、いくぞ！

第1章：前期から後期への大転回～「語りえぬもの」からの脱却～

まず、ウィトゲンシュタインという男のヤバさについて少し復習しておこう。

こいつは若い頃に『論理哲学論考』っていうめちゃくちゃ薄い本を書いて、「はい、これで哲学のすべての問題は解決しました！俺、天才！じゃあ哲学辞めるわ！」って言って、小学校の先生になっちゃったんだよな。

前期の彼は、「言葉とは、世界の事実を写し取る絵である（写像理論）」と考えていた。だから、世界に実在しないもの（倫理、宗教、美、そして「心」の奥底）については「語りえぬものについては、沈黙しなければならない」と言ってスパッと切り捨てたわけだ。

.....なんだけどさ。

先生もな、昔、大失恋したときに「俺のこの悲しみは言葉にならない。沈黙するしかない.....」とか言って、三日三晩、部屋で体育座りしてたことがあるんだよ。でもな、四日目にお腹が空いて、近所の牛丼屋に行って「ねぎ玉牛丼、特盛で」って言った瞬間に気づいたんだ。「あ、俺、普通に言葉使って生きてるわ」って。

ウィトゲンシュタインも（牛丼屋に行ったかどうかは知らんが）、小学校で子どもたちに言葉を教えているうちに気づいちゃったんだよ。

「あれ？言葉って、世界を正確に写し取る『絵』なんかじゃなくね？もっと適当で、いろんな使い方をする『道具』じゃね？」って。

ここから、彼の「後期」の哲学が始まる。その集大成が、今日読む『哲学探究』だ。彼は自分の過去の天才的な理論を「あれ間違ってたわ、ごめん！」って全否定したんだ。この潔さ、お前も見習えよ。模試でE判定だった勉強法はさっさと捨てろ！

第2章：言葉はルールのある遊びだ！～「言語ゲーム」と「家族的類似性」～

さて、後期のウィトゲンシュタインが編み出した最強のキーワード、これが「言語ゲーム」だ。太字でノートに書いとけ！

彼は言葉を、将棋やサッカーのような「ゲーム（遊び・競技）」に例えた。

将棋の「飛車」という駒は、木でできているから意味があるんじゃない。「縦横にどこまでも動ける」というルールの中で使われるから意味があるんだよな。言葉も同じだ。「水！」という言葉は、H₂Oという物質の「名前」であるだけでなく、砂漠で倒れそうなときは「水をくれ！」という命令になるし、火事的时候は「水をかけろ！」という警告になる。

つまり、言葉の意味とは、生活の中でどう使われているか（使用）によって決まるんだ。

じゃあ、いろんな「ゲーム」に共通する本質って何だろう？

勝ち負けがあること？ いや、一人用パズルにはないな。

ボールを使うこと？ いや、トランプには使わないな。

楽しいこと？ いや、先生の高校時代の地獄の野球部の練習はちっとも楽しくなかったぞ！

ここで彼が持ち出したもう一つの超重要概念が「家族的類似性」だ。

お前ら、親戚の集まりを想像してみてくれ。

A君は鼻がオカンに似てる。オカンは目がA君のおじいちゃんに似てる。おじいちゃんは輪郭がA君の妹に似てる……。

これ、「全員に共通するたった一つのDNAパーツ」があるわけじゃないんだよ。それぞれが部分的に重なり合い、似通っているネットワークがあるだけだ。

言葉も「本質」なんてない。部分的に似ている使い方がネットワークのようにつながっているだけ。これを「反本質主義」と呼ぶ。

「愛とは何か？」「正義とは何か？」なんて、たった一つの正解（本質）を探すから哲学者は迷子になるんだよ。「愛」という言葉が日常の言語ゲームでどう使われているかを見ろ、ってのが彼のスタンスだ。

第3章：【本題】「痛い！」は心の実況中継ではない？

さあ、ここからが「心の哲学」の核心だ。みんな、目を覚ませ！寝てるやつは隣のやつをつねってやれ！

……痛い！って起きたか？よし。じゃあ聞くぞ。

その「痛い」という言葉は、いったい何を表している？

デカルト以降の伝統的な哲学者はこう考える。

「心の中には私にしか見えない『痛み感覚』というプライベートな空間があり、『痛い』という言葉は、その内なる感覚を外側に向けて報告する実況中継である」と。

これを「私的言語（プライベート・ランゲージ）」の考え方という。

私にしかわからない感覚を、私だけが名付けることができる言葉のことだ。

しかし！ ウィトゲンシュタインは「私的言語の不可能性」を主張して、これを完膚なきまでにぶっ壊す！

いいか、よく考えろ。

もし「痛い」という言葉が、お前の心の中の誰にも見えない「感覚X」につけた名前だとする。じゃあ、お前が次に「痛い」と感じたとき、それが昨日の「感覚X」と本当に同じものかどうか、どうやって確認するんだ？

心の中には、比較するための定規も、ジャッジしてくれる審判もない。「同じだ」とお前が思い込んでいるだけで、実は全然違う感覚かもしれないだろ？ 誰にもチェックできないルールは、もはやルールじゃない。つまり、言語ゲームとして成立しないんだ！

じゃあ、「痛い」って言葉は何なんだよ？ って話になるよな。

ウィトゲンシュタインはこう言う。

「言葉による痛みの表現は、泣き声の代わりである」

ここ、鳥肌ポイントな。

赤ちゃんは転んだら「ウーン！」って泣くよな。これは心の中の報告じゃない。ただの自然な振る舞い（反応）だ。

それが成長するにつれて、親から「痛かったねえ」と教わり、泣く代わりに「痛い！」と言葉を発したり、顔をしかめたりするようになる。

つまり、「痛い」という言葉は、心の中にある秘密の箱を覗き込んで「あ、痛みメーターが80ですね」と報告しているんじゃない。「痛い！」と言う行為そのものが、痛みという言語ゲームの振る舞いの一部なんだよ。

第4章：「箱の中のカブトムシ」の思考実験 ～君の赤と僕の赤～

ここで、ウィトゲンシュタインが使っためちゃくちゃ面白くて、そしてちょっと不気味な思考実験を紹介しよう。これが有名な「箱の中のカブトムシ」だ。

想像してくれ。

お前ら全員が、それぞれ自分だけの「小さな箱」を持っているとする。

その箱の中には、何か分からないけど「あるモノ」が入っている。

みんな、自分の箱の中身を「カブトムシ」と呼ぶことにしている。

ただし、ルールが一つある。他人の箱の中身は絶対に見ることができない。

さて、どうなるか。

A君の箱には、本物のカブトムシが入っているかもしれない。

B君の箱には、カマキリが入っているかもしれないのに、B君はそれを「カブトムシ」と呼んでいる。

C君の箱の中身は、常に形を変えるスライムかもしれない。

そして、D君の箱は.....実は空っぽかもしれない！

でもな、もしみんなが「あー、今日の俺のカブトムシ、元気だわー」「わかるー、私のもー」って会話をして、社会がうまく回っているなら.....

「箱の中に実際に何が入っているか（あるいは空っぽか）」は、言語ゲームにおいて全く意味を持たないんだよ！

.....おい、ちょっと顔が青ざめてるやつがいるな。わかるぞその気持ち。

これを「心」に当てはめてみる。

「箱」は、お前らの「心（意識）」だ。

「カブトムシ」は、お前らが感じている「痛み」や「赤い色を見たときの感覚（クオリア）」だ。

お前が見ている「赤色」の感覚と、俺が見ている「赤色」の感覚が、内面的に全く同じかどうかなんて、誰にもわからない。俺の箱の中のカブトムシと、お前の箱の中のカブトムシは違うかもしれない。

でも、信号機を見て一緒に「赤だから止まれだね」と行動できている以上、心の内側にどんな「本物の感覚」があるかは、言葉の意味（ゲームの成立）から完全に抜け落ちるんだよ。

これをウィトゲンシュタインは「パラダイムからの内的対象の脱落」と表現した。

つまり、「心の中に私だけの特別な何かがある！」という哲学者の執着は、言葉のカラクリが生み出した「錯覚」に過ぎないってことだ。

.....先生な、昔、母親が作ってくれる弁当のおかずがいつも「謎の茶色い塊」だったんだよ。

肉なのか、魚なのか、大豆なのかわからない。でも俺はそれを「ハンバーグ」と呼び、お袋も「ハンバーグ」と呼んでた。それで我が家は平和だったんだ。大人になってから「あれ、実は

パンの耳を丸めて揚げたやつよ」って言われたときは絶望したけどな！

でも、あの弁当を食べていた当時の俺たち親子の間では、あれは間違いなく「ハンバーグという言語ゲーム」として成立していたんだ。中身が何かなんて、関係なかったんだよ……（涙）。

第5章：じゃあ「心」って何なんだ？ ～外側に開かれた心～

さて、脱線から戻るぞ。涙拭くからちょっと待ってろ。

ウィトゲンシュタインは「箱の中身はどうでもいい」と言った。

これを誤解する奴がたまにいる。「じゃあウィトゲンシュタインは、人間には心なんて無い（行動主義）と言ってるんですね！」ってな。

ブブー！ 不正解だ。

彼は「心がない」なんて一言も言っていない。ただ、「心というものを、内側に閉じこもった『秘密の部屋（私的対象）』として捉えるのをやめろ」と言っているんだ。

俺たちが「あの人は悲しんでいる」と理解するのは、あの人の脳内スキャンをして神経伝達物質の量を測ったからじゃないよな。

うつむいて、涙を流して、声を震わせているという「振る舞い」を見て、そして俺たち自身もそういう経験を共有しているという「生活様式（フォーム・オブ・ライフ）」が根底にあるから、相手の心を理解できるんだ。

心は、頭蓋骨の奥底に隠された密室じゃない。

言葉や、表情や、身振り手振りを通じて、すでに世界（他者）に向かってバーンと開かれているものなんだよ。

デカルトは「我思う、ゆえに我あり」と言って、自分一人の思考の殻に閉じこもった。

でもウィトゲンシュタインは、『哲学探究』を通じてこう言っているんだ。

「言葉があるということは、他者がいるということだ。他者とルール束（言語ゲーム）を共有しているからこそ、私たちは心を持つことができるのだ」と。

終わりに：言語の「呪い」を解く哲学

ウィトゲンシュタインは、「哲学とは、言語によって引き起こされた知性の麻痺を治療することだ」と言っている。

「心とは何か」「私とは何か」と悩みすぎて、壺を買っちゃいそうになったり、部屋から出られなくなったりするのは、言葉の使い方（文法）を間違えて、幻影と戦っているだけなんだと。

お前らもな、受験勉強してて「本当の自分って何だろう？」とか「俺の本当の偏差値の居場所はどこだ？」とか、深夜にポエムみたいなこと考え出しちゃうときがあるだろ。
そういうときは、ウィトゲンシュタインを思い出せ。

「本当の自分」なんていう秘密の箱（カブトムシ）を一生懸命覗き込もうとするな。箱の中は空っぽかもしれないぞ。

それよりも、明日学校に行って、友達と「おはよー」って笑い合ったり、先生に「ここわかんねー！」って質問したりしろ。その他者との交わり（言語ゲーム）の中にこそ、お前の「心」はちゃんと存在しているんだから。

いいか！心は閉じこもるためのもんじゃない。世界と遊ぶための道具だ！

はい、今日の講義はここまで！

『哲学探究』の「私的言語の不可能性」と「言語ゲーム」、しっかり復習しとけよ！次回の小テストで「箱の中のカブトムシ」について書かせるからな！

起立、礼！お疲れさん！また来週！